

頼れる先輩OLは、終電後のオフィスで隙を見せる 一二人だけの残業―

完璧で頼れる先輩OLが、終電後のオフィスで年下の後輩にだけ、張りつめた肩の力を抜いていく純愛
夜更け文庫／夜野しずく

本作品はフィクションです。登場人物はすべて18歳以上の成人であり、実在の人物・団体とは一切関係ありません。

プロローグ

同じ部署の人間は、みんな桐谷明日香きりたに あ す かを「頼れる先輩」だと言う。

どんな無茶な納期でも涼しい顔でさばき、後輩のミスはいつのまにか拾って整え、室長にさえ臆さず意見する。化粧も髪も着こなしも、いつだって寸分の間がない。社内の誰もが、困ったときはまず「桐谷さんに訊け」と口を揃える、完璧な先輩。

——その人が今、俺の腕のなかで、まるで別人みたいに息を乱している。

蛍光灯はとうに落として、非常口の緑の灯りと、窓の外
の街の明かりだけが、フロアをぼんやりと照らしていた。
終電もとっくに行ってしまった、深夜のオフィス。昼間は
キーボードの音や電話の声で満ちている広いフロアが、今
は二人ぶんの息づかいだけで満ちている。机の島も、消え
たコピー機も、ホワイトボードの走り書きも、すべてが夜
の底に沈んで、ただ静かだった。

昼間の明日香を思い浮かべる。背すじをまっすぐに伸ば
して、てきぱきと指示を出す先輩。会議室では誰よりも先
に要点をまとめ、取引先の前では完璧な笑みを浮かべ、後

輩が落ち込んでいれば「大丈夫、ここからやり直せばいいだけ」と静かに背を押す。隙のない「桐谷さん」。誰もが憧れ、誰もが頼り、けれど誰も、その肩の重さには気づかない。

その同じ唇が、今は俺の名前だけを、溶けるように呼んでいる。

「……直、くん」

ひとつに結っていたはずの黒髪は、いつのまにかほどけて、白い首筋に幾筋も乱れて貼りついていて。いつもは涼しく前を見据えている切れ長の目もとが、今は潤んで、こちらを見上げてくる。きっちりと締めていたブラウスの胸もとが、浅い呼吸に合わせて、頼りなく上下していた。

完璧な鎧を一枚ずつ脱いだあとの、何もまとっていないこの人を知っているのは、たぶん、世界で俺だけだ。

このフロアで、昼間の彼女しか知らない人間は、想像もしないだろう。「桐谷さん」が、終電の消えた夜に、こんなふう息を乱すなんて。机ひとつ向こうの席で、今日も平然と仕事をさばいていたあの先輩が、と。けれど今、この暗いフロアに満ちている熱を、知る者は誰もいない。それでいい、と直は思った。この夜は、二人だけのものだ。

それでも――俺だけが知っている。この人の、昼の顔と、誰にも見せない無防備な顔を。



——ここから先は製品版でお楽しみください——